

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 7 日現在

機関番号：10101

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2015

課題番号：25360001

研究課題名(和文)台湾の客家運動と海峡兩岸の多元化の潮流に関する実証研究

研究課題名(英文) Empirical research on the Hakka Ethnic Movement in Taiwan and the Rising Social Pluralism in Both Sides of the Taiwan Strait

研究代表者

藤野 彰 (FUJINO, AKIRA)

北海道大学・メディア・コミュニケーション研究院・教授

研究者番号：60646404

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,700,000円

研究成果の概要(和文)：1980年代末、台湾の民主化、中国の改革・開放を背景に、海峡兩岸で漢民族の族群、客家(ハッカ)の復興運動が始まった。それまで「透明人間」視されていた客家は「解放」された。しかし、台湾では民主化の達成によって客家の政治権利まで保障されるようになったのに対し、中国では客家の復権は文化的、経済的分野に限定されている。たとえば、客家は中国革命に対して多大な貢献を行ったにもかかわらず、中国共産党の公式な歴史はいまだに客家の存在をほとんど無視している。それは「客家タブー」とでも呼ぶべき現象であり、そこには共産党の特殊な政治イデオロギーや、革命の中の肅清といった負の遺産が大きな要因として潜んでいる。

研究成果の概要(英文)：The Hakka ethnic movement (1988) in Taiwan changed the political status of Hakka people and they finally achieved the Hakka Renaissance. The Hakka people in China also rose in their social and cultural status backed by the reform and open-up policies in the 1980's. But they are still faced with a political paradox. Although the Hakka people made a vital contribution to the socialist revolution in the early 1930's, the official revolutionary history of the CPC does not dare to refer to the matter as if the revolutionary achievement by Hakka were under a taboo. The main reasons for "Hakka taboo" are as under. The storm of massacres was caused by the CPC in the revolutionary base areas, or Hakka territory. This is a negative legacy of the CPC. Their cooperative spirit easily causes a misunderstanding that they are poisoned by localism and sectionalism which are banned in the regime. The Hakka in China are still invisible in a political sense, the exact opposite of Taiwanese Hakka.

研究分野：現代中国論

 キーワード：客家運動 中台関係 中国多元化 客家と革命 中国共産党史観 毛沢東と客家 広東「地方主義」  
客家タブー

## 1. 研究開始当初の背景

(1) 台湾第2の族群である客家は国民党独裁時代、その存在を自己主張することを抑制され、社会的に「透明人間」化した。しかし、民主化の機運が高まりつつあった1988年、客家の政治的、文化的復権を要求する客家運動が勃発し、独自の族群としての公民権を獲得していった。

一方、共産党統治下の中国においても建国後、客家は台湾とは異なる理由によって「透明人間」化していった。だが、改革・開放が始まり、1980年代末になると、客家研究が解禁されたのを皮切りとして客家居住地域における客家文化の振興に拍車がかかるようになった。

つまり、1980年代末以降、台湾海峡の兩岸であたかも双方が呼応しあうかのように、客家をめぐる状況に大きなブレイクスルーが見られた。中台の客家の「透明人間」化の背後にどのような原因があったのか。そこにはどのような共通点と相違点があるのか。台湾で起きた客家の政治的復権に象徴される多元化は中国でも起こりうるのか。これが第一の問題意識である。

(2) 客家は中国近現代の重要事件、例えば太平天国運動、辛亥革命、共産党革命に重要な当事者として深くかかわってきた。客家の歴史を語ることは近現代の歴史の重要な一面を語ることでもある。しかし、中国共産党が統率する独自の歴史観の制約の下で、客家の歴史は必ずしも自由には語られていない。とりわけ、客家と中国革命の関係については、中国共産党の公式の党史、革命史の世界ではほとんど無視されており、学術の世界でもまだ限られた研究しか行われていない。いわば、実態として「客家タブー」とでも呼ぶべき状況が存在する。中国ではなぜ客家という視点からの革命史、政治史が書かれないのか。これが第二の問題意識である。

## 2. 研究の目的

(1) 中国における客家研究はこれまで客家の起源や形成に関する歴史学的研究や、人類学、民俗学、言語学などの分野での研究が主体であった。客家と共産党政治とのかかわりという観点から客家問題が研究されたことはなかった。日本の客家研究も、客家問題が内包する政治的な敏感さについて、専門家から断片的にいくつかの疑問が提起されてきた程度であり、基本的には未開拓の分野となっていた。客家研究に「客家と共産党政治」という新たな視点と分野を提示し、より多角的な客家研究の構築に貢献することが主要な研究目的である。

(2) 中国共産党の1930年代の革命は、中央革命根拠地が客家居住地区（江西・福建・広東の省境地帯）とすっぽり重なっていたことからわかるように、客家の人的、物的資源を

最大限活用することによって維持された。しかし、「客家タブー」の存在により、その重要な歴史事実は国民レベルの共通認識とはなっていない。「客家タブー」はいかに生まれ、形成されたのか。その現状はどうなっているのか。また、それは中国の政治、社会の多元化の問題とどう関連してくるのか。これらを明らかにすることが具体的な研究目的である。共産党の歴史観の中における客家の位置づけや、客家をめぐる言説を分析することによって共産党政治が内包する特性、矛盾、課題を浮き彫りにし、中国の真の多元化の道筋に対して問題提起を行いたい。

## 3. 研究の方法

(1) 本研究は以下の仮説に基づいて調査を進めた。＜中国の客家研究の空白期には1980年代になってピリオドが打たれたわけではない。客家研究が全面的に解禁されているわけではないという意味で、客家研究には今も空白地帯が存在している。しかも、その客家研究の空白地帯の問題は共産党体制を支えてきた伝統的な政治理念、政治原則（共産党の指導、中央集権、民族平等、中華民族概念、安定と団結）と密接な関連性を有しており、中国の政治、社会の実質的な多元化を阻む根源の問題と深くかかわっている。以上の視点に立てば、客家研究の空白地帯がどのように埋められていくか、近現代史における客家の位置づけがどう変化していくかという問題は中国の多元化の方向性を分析する重要な座標軸の一つとなりうる＞

(2) 2013-2015年度の3年間、台湾および中国（江西・福建・広東）で計4回の現地調査を行った。特に中国では「客家をめぐる言説」が各地の歴史博物館、革命博物館などの公共の場でどのように扱われているか（つまり、共産党の公的な見解がどう示されているか）に重点を置いて調査を実施した。また、毎回の現地調査の中で中台双方の客家研究者たちと学術上の意見交換を行い、有益な知見を得た。

(3) 台湾、中国および日本国内で関連の文献調査、文献収集を行った。文献調査にあたっては「客家タブー」を裏付ける言説、中国革命および共産党政治と客家の関連を示す資料の発掘に力を入れた。具体的な研究内容は以下の7項目に絞った。

客家タブー 現代中国への問題提起  
客家をめぐる虚実 屈折するエスニック集団  
毛沢東と客家 革命根拠地のトラウマ  
葉剣英と広東「反地方主義」 客家王国の挫折  
封印された客家 政治とイデオロギーの呪縛  
海峡兩岸の客家復興運動 目覚めた「隠形人（透明人間）」

未完の客家ルネッサンス

4. 研究成果

(1) 客家問題への対応という観点から、中国共産党史、中国革命史の記述を総合的に分析した結果、そこには二つの流れが交錯していることが明らかになった。第一の流れは、中央のお墨付きを得た、いわゆる公式の欽定版革命史であり、これを「正統革命史」と呼ぶことにする。これには中共中央党史研究室、中央文献研究室など党中央研究機関がかかわった権威性の高い革命史書籍が該当する。例えば、『中国共産党歴史』はその代表的なものであり、共産党の歴史観を忠実に反映した正統革命史と言える。また、この正統革命史の記述、観点を忠実に踏まえ、研究者らによって執筆された様々な革命史の著作もこのジャンルに属する。小学校から大学までの学校教育で用いられる各レベルの歴史教科書も、広い意味の正統革命史と見なせる。各地の革命博物館、記念館の展示内容も基本的に正統革命史をなぞっている。以上の状況から正統革命史の社会的影響力は圧倒的に大きい、そこには客家ないし客家問題はほとんど登場しない。

第二の流れは、客家と共産党、客家と革命の関連性に着目し、正統派革命史には欠けている視点から中共党史、革命史をとらえ直すという試みである。主として地方の、民間の研究者らが問題提起をしており、彼らの多くは客家人である。研究はまだ質量ともに限られた範囲でしか行われておらず、社会的な認知度も影響力も大きくはない。その意味でこれを「非正統革命史」と位置づけることにする。

以上の状況から、「客家タブー」とは、中国の近現代史、革命史、党史をめぐる、共産党の公式史観と客観的な史実との間の断層に潜んでいる「客家に触れることを忌避する状況」と定義される。同じ革命史、党史を土俵としながら、「客家が語られる世界」と「客家が語られない世界」が、水と油が混ざりあうことがないように、ほとんどくっきりと分かれた形で存在している。いわば、ある種の「棲み分け」がなされていることがわかった。

(2) 客家とゆかりのある江西・福建・広東各省の革命記念館、客家博物館を調査した結果、革命博物館では当然のこととして革命の歴史を通じて共産党の大きな貢献が強調されているが、革命と深いかわりを持つ客家への言及がなく、一方、客家博物館ではもとより客家の歴史や文化が語られているが、革命とかかわりのある事柄は展示内容からことごとく排除されているという不自然な状況が見られることが判明した。これらの記念館、博物館は共産党当局によって愛国主義教育基地に指定され、一般国民に対する思想政治教育、共産党政権の正統性宣伝の役割を担わされている公的施設であり、そこでの客家の

扱われ方には当局の政治判断が反映されていると考えられる。調査を行った施設の一覧と展示内容は以下の通りである。(「は」は「極めて部分的な言及」を意味する)

博物館・記念館名	所在地	客家への言及	革命への言及
(1) 中国客家博物館	広東 梅州		×
(2) 江西客家博物院	江西 贛州		×
(3) 汀州客家博物館	福建 長汀		×
(4) 中央革命根拠地歴史博物館	江西 瑞金	×	
(5) 井岡山革命博物館	江西 井岡山	×	
(6) 広州近代史博物館	広東 広州	×	
(7) 葉剣英記念館	広東 梅州		
(8) 葉剣英故居	広東 梅州	×	
(9) 洪秀全故居記念館	広東 広州	×	
(10) 洪秀全故居	広東 広州		

一例を挙げると、広州市花都区(旧・花県)の洪秀全故居に併設されている洪秀全故居記念館は、洪秀全と太平天国運動の歴史を紹介する施設であるが、館内の展示を見ると、洪秀全が客家出身であることはもとより、太平天国運動に多くの客家人が関わった歴史事実は一切説明されていない。共産党の歴史観、唯物史観、階級闘争史観によれば、太平天国の歴史的意義は腐敗した清朝への反抗、外国勢力の理不尽な中国侵略に対する抵抗にこそ存在するからであろう。

当時、客家が置かれていた社会状況に言及すれば、広東の血で血を洗う激烈な土客械闘、客家差別の歴史に触れざるを得なくなる。そのように客観的な展示内容にすると、共産党が強調したい太平天国運動のイメージは「偉大な農民運動」というきれい事だけでは済まなくなってくる。要するに、太平天国運動について都合のいい歴史の側面を語り、枠をはめた歴史観を国民に植えつけていく上で、客家という要素はまったく邪魔な存在、不要な存在なのである。

また、革命博物館で客家への言及がないのは、階級闘争史観をはじめとしたイデオロギー問題もあるが、革命根拠地では共産党の強制的動員や大規模な粛清によって多数の客家が犠牲になっており、こうした扱いにくい問題が潜んでいることへの警戒感が客家を意識的に歴史から排除する要因となっている。

(3) 中国の客家研究の世界では「客家タブー」という言葉は聞かれない。共産党の文献にも

そのような言説はうかがえない。しかし、資料調査を行い中でタブーの存在を強く示唆する証言をいくつか確認できた。

周昂 2010 「回家記」『中国週刊』第 11 期

記事は客家学者の譚元亨が記者に語った回想を紹介。「もし客家人の間で客家語を話したら、他の人からセクトをつくるものだと言われかねなかった」、「1997 年に北京で『客家魂』というシンポジウムを開いたとき、ある老将軍が『50 年代のころ、私たち北京の客家人は、山頭主義（セクト主義）をやるものだと言われるのを恐れて、誰も客家語を話そうとはしなかった』と語った」。記事は「このような雰囲気の中で、客家に関連するあらゆるものが、長期にわたって封印され沈黙状態に陥った」と指摘している。

李逢蕊 1997 「緬懷客家学研究顧問陳丕顯同志」『龍岩師專學報（社会科学版）』第 15 卷第 2 期

李逢蕊は広東省梅州出身の客家で、華僑史、客家学研究の先駆者の一人。元中央書記処書記で客家の陳丕顯の証言を紹介している。「客家学は新しい分野であり、新しい学問だ。客家学研究を提唱するのは、客家の経済を発揚し、四つの近代化の建設を加速するのが目的なのだ。どうして客家幫（客家グループ）などであるものか」

鐘漢波「客家当自豪 在惠州市客家文化研究会成立大会上的報告」

<http://www.hzkejia.com/list.asp?id=9597>

（2015 年 5 月 19 日閲覧）

鐘漢波は広東省客属海外聯誼会常務副会長で、2003 年 11 月 29 日、惠州市客家文化研究会成立大会で以下の報告を行った。「ある人たちの考え方や認識は偏向しており、客家の歴史を研究したり、客家精神を発揚したりすることは狭隘な民族主義であると考えている」

2011 『歷程 寧化県客家工作 20 年回眸』中国出版

1990 年代の福建省寧化の石壁客家祖地建設にかかわる記述。「当時、客家が懇親を深めることや、族譜の研究を行うことについては、とりわけ、先祖を祭る活動を組織することについては、それが合法的なのかどうかをめぐって、社会に様々な意見があった。関係者は、宗派（セクト）、宗族、封建迷信活動と見なされてしまうのではないかということを心配した」

以上の証言の中の重要なキーワードは「山頭主義（セクト主義）」、「客家幫（客家グループ）」、「狭隘な民族主義」、「宗派（セクト）」である。つまり、客家とこれらの政治的に否定的な概念が結びつけてとらえられる傾向が存在していた（あるいは今も存在している）ことを物語る。

(4) 1980 年代末以降、中国ではなぜ客家研究、客家文化が復興したのか。主として経済目的、

政治目的、地域振興目的の三つの理由があることがわかった。改革・開放政策の最優先課題は経済建設を加速することであり、そのためには海外華僑・華人の経済パワーをテコに外資の積極的な対中投資を促す必要があった。客家のグローバルなネットワークは中国の発展戦略にとって利用価値の高い資源と考えられた。客家は台湾の二大族群の一つであり、そのルーツは中国大陸にある。1980 年代末から中台の交流が徐々に解禁され、中国側は中台統一攻勢を強化した。客家は中台の歴史的、文化的きずなの強さを象徴する存在として、中国側の統一戦線工作の重要なカードと見なされるようになった。改革・開放以降、地域振興が中国全体の発展を左右する重要課題として浮上した。客家居住地域は発展の遅れた内陸地帯であり、いかに地域振興を図るかが喫緊のテーマとなっていた。そこで、発展の起爆剤として白羽の矢が立ったのが地域を特徴づける客家の歴史・文化である。2008 年、客家の代表的な民居である土樓群が世界文化遺産に登録されたことに象徴されるように、客家は地域の観光開発、文化振興のキーワードとしてもはやされるようになった。

(5) 中台の客家復興の比較では、台湾の客家復興が客家自身による草の根の運動として開始され、政府を突き動かしていったのに対し、中国の客家復興は学界の客家研究を萌芽とし、対外開放の進展を追い風として党政主導型で盛り上がりを見せていったことがわかった。中台双方で客家はそれぞれの政治的理由により「隠形人（透明人間）」の地位に置かれてきた。台湾では民主改革の流れの中で、中国では改革・開放の流れの中で、客家は「解放」された。しかし、決定的に異なるのは、台湾では民主化が政治的多元化をも含む客家の「解放」を実質的に大きく推し進めたのに対し、中国では客家文化振興など非政治分野における限定的な「解放」にとどまっていることである。そこに「客家タブー」が存在する。

中国では客家研究が盛んに行われるようになっていながらもかかわらず、台湾の客家運動への関心は低く、研究論文も数えるほどしかない。このことは中国の客家研究界の台湾客家運動に対する関心の低さを物語るといっても、台湾客家運動が中国にとっては政治的意味合いにおいて非常に微妙な問題をはらんでおり、扱いにくいテーマであるということを示している。

(6) 建国後の「客家と共産党政治」に関する問題では 1950 年代前半、客家の根拠地である広東で起きた 2 度にわたる反「地方主義」の問題に注目した。この政治運動の中では、広東客家の総帥である葉剣英、古大存ら多くの客家系指導者が「地方主義を行った」として厳しい批判にさらされ、更迭、失脚の憂き

目を見た。「広東地方主義」の問題はそもそも葉剣英が最高責任者として取り組んだ広東の土地改革が発端だった。葉剣英らは華僑が多く、商業が発達している広東の特殊事情に配慮した穏健な土地改革路線をとったが、党上層部からは「平和的な土地改革であって富農路線だ。階級意識が欠如している」との批判を浴び、これが「地方主義」批判に発展した。

この政治運動はもとより客家のみを標的にしたものではなかった。中央が特に客家に狙いを絞り、客家系幹部の政治的影響力を削ぐために、広東地方主義批判の狼煙を上げたという証拠は見つかっていない。しかし、資料調査の結果、問題の発端となった試行段階の土地改革は客家の本拠地である梅州地区を中心に展開され、それを指揮した幹部たちの多くも客家であったことが判明した。土地改革工作団の指導幹部 12 人中 8 人は客家であり、事実上、客家主導の土地改革だったのである。(以下の表は広東省土地改革工作団の構成員とその属性。は客家)

	役職	氏名	出身地
省 工 作 団	団長	李堅真	広東・豊順
	副団長	林美南	広東・揭陽
	副団長	羅明	広東・大埔
	秘書長	徐雲	広西・邕寧
興 寧 分 団	団長	廖偉	広東・梅県
	副団長	梁集祥	広東・梅県
	副団長	羅亜輝	広東・興寧
龍 川 分 団	団長	鐘俊賢	広東・五華
	副団長	楊応彬	広東・大埔
	副団長	黄中強	広東・河源
揭 陽 分 団	団長	林美南 (兼)	広東・揭陽
	副団長	呉南生	広東・潮陽
	副団長	孫正明	広東・揭陽

反「地方主義」は広東客家にどんな衝撃を与え、客家たちは事件をどう受け止めたのか。要約すると、以下のようになる。

- ・広東客家の代表的人物として自他ともに認められていた葉剣英が第1次反地方主義の矢面に立たされ、権力基盤の広東からの異動を余儀なくされたこと。

- ・第2次反地方主義では客家の有力な古参指導者の古大存が激しい攻撃を受け、反右派闘争ともからんで「地方主義分子」「右派分子」との二重の批判を浴びたこと。

- ・「広東特殊論」の表れとして批判された初期の土地改革を実質的に指導した主体は客

家系の幹部たちであり、その対象となった地域も客家居住県が中心であったこと。このことは各レベルの客家系幹部多数が反地方主義に巻き込まれ、批判されたことを意味する。

- ・客家は宗族を中心とした一族の結束が強固であるが、「地方主義は極端な個人主義と封建宗派主義が結びついた産物であり、共産主義とは絶対に相いれない」と批判され、客家社会の伝統的なシステムと文化そのものが政治イデオロギーによって否定されたこと。

- ・華僑が多いという広東の特殊性が否定され、華僑の家屋没収など後々まで禍根を残す問題が発生し、華僑およびその家族が大きな打撃を受けたこと。当然ながら歴史的に多くの華僑を海外に送り出している梅州など客家地域は深刻な打撃をこうむった。

- ・総括すると、反「地方主義」運動は、同郷、同族の絆を重視し、強固な団結力を誇る客家人社会に深刻な衝撃を与え、客家アイデンティティを政治的に封印する結果をもたらした。とりわけ、政官界、学术界をはじめとした知識階級の客家人に及ぼした心理的圧力は大きかったと考えられる。このことが改革・開放までの長期にわたる「沈黙」を客家人社会に強いる遠因の一つになったと推測される。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計1件)

藤野彰、対中認識 多元的な視点で、読売新聞、査読有、2015年11月27日、pp.14

〔学会発表〕(計3件)

藤野彰、客家と現代中国、北大祭公開講義、2015年6月6日、北海道大学(北海道札幌市)

藤野彰、習近平がおびえる歴史的負債、東洋文化研究会、2014年10月11日、岩波セミナールーム(東京都千代田区)

藤野彰、異質な隣人・中国といかに向きあうか、鈴木邦男シンポジウム、2013年10月12日、札幌時計台(北海道札幌市)

〔図書〕(計3件)

藤野彰 他、柏艸舎、「日本の分」について考える2、2015、221

藤野彰 他、共鳴するガヴァナンス空間の現実と課題 「人間の安全保障」から考える、晃洋書房、2013、287

藤野彰、柏艸舎、「嫌中」時代の中国論 異質な隣人といかに向きあうか、2013、329

#### 6. 研究組織

(1) 研究代表者

藤野 彰 (FUJINO, Akira)

北海道大学・大学院メディア・コミュニケーション研究院・教授

研究者番号：60646404